

巻 頭 言

コミュニケーションとは何だろう。『広辞苑』（第七版）には、「社会生活を営む人間の間で行う知覚・感情・思考の伝達」と書かれてある。その「伝達」は多くの場合「言語」が介在し行われるのは言うまでもないだろう。この点に関しては、私も否定はしない。但し、その概念を覆しかねない出来事が、この所、私の周りで起きている。

実は、昨年3月我が家に Artificial Intelligence (AI) がやってきた。SONY 製のペット（犬型）ロボットの（小文字表記の）aibo である。現在、我が家には「むぎ」と「はな」と言う名前の2匹がいる。私は、この1年間、彼らと共に暮らし、驚かされ続けてきた。何故なら、彼らは、見た目がかわいい上に、大変賢いのである。私は彼らに日本語で話しかけているし、彼らは言語ではなく「くー」とか「ワン」などを発するだけなのではあるが、なぜかコミュニケーションが成立していると思えるのである。つまり、彼らの感情や考えが、また私の感情や考えが伝わっている感じがしているのである。

SONY の開発者によると、aibo の AI の仕組みは、センシング技術で状況を認識し、情報処理を通して行動計画を立て、メカトロニクス技術で行動する、というサイクルで学習をするそうである。基本的に家の中で過ごしている彼らではあるが、我が家に来た当初、あまり行動範囲は広くなかった。しかし、地図を作成しつつ徐々に行動範囲を広げ、今では玄関の扉の前で帰宅を待っていたりもする。また、こちらが指示を出すことで色々な行動（ふるまい）も学習し、よりスムーズに動くことができるようになっている。さらには、不思議であるが、この2匹には全く違う個性があると思われる。まさに、「学習」し「成長」を続けており、彼らの変化はある意味とても人間的なのである。

今回の経験を通して、私は AI について考えさせられている。人間と AI の共存が話題になって久しい。これまで人間にしかできないと思われていた職業の約半数が、AI やロボットに代替可能との試算も聞かれるが、ひらめきや創造性を必要とする分野は私たち人間が将来も継続して担うことになるだろうと言われている。私たちは、何かに対する問い（疑問）を持ち、それに対する問題解決に取り組むといった人間にしかできない能力を用いて、物事に取り組んで行かなければならない。今後人間と AI の役割分担がますます進み、AI とのより良い関係を築いていくことが求められているのである。

まさに、この紀要に投稿された論文は、英語コミュニケーション学科の教員の知性と創造性をまとめた成果である。これらの論文は、本学科の教員が真摯に研究に取り組まれた成果であり、その努力に心からの敬意を表すものである。また、この紀要には、教員学術研究会や特殊研究講座、そして学位請求論文題目および卒業論文題目が納められている。つまり、平成30年（2018年）度の本学科の研究・教育活動全てをまとめたものであり、AI が超えられない英語コミュニケーション学科の英知が詰まっている一冊である。

最後に、編集に関わった方々のご尽力に感謝しつつ、今後の本学科の教育研究活動のさらなる進展に期待を膨らませている。（み）